

# シームレス地質図でたどる 幸田文『崩れ』(第8回)

森尻理恵<sup>1)</sup>・中川 充<sup>1)</sup>・斎藤 眞<sup>1)</sup>

## 8. 1 稗田山

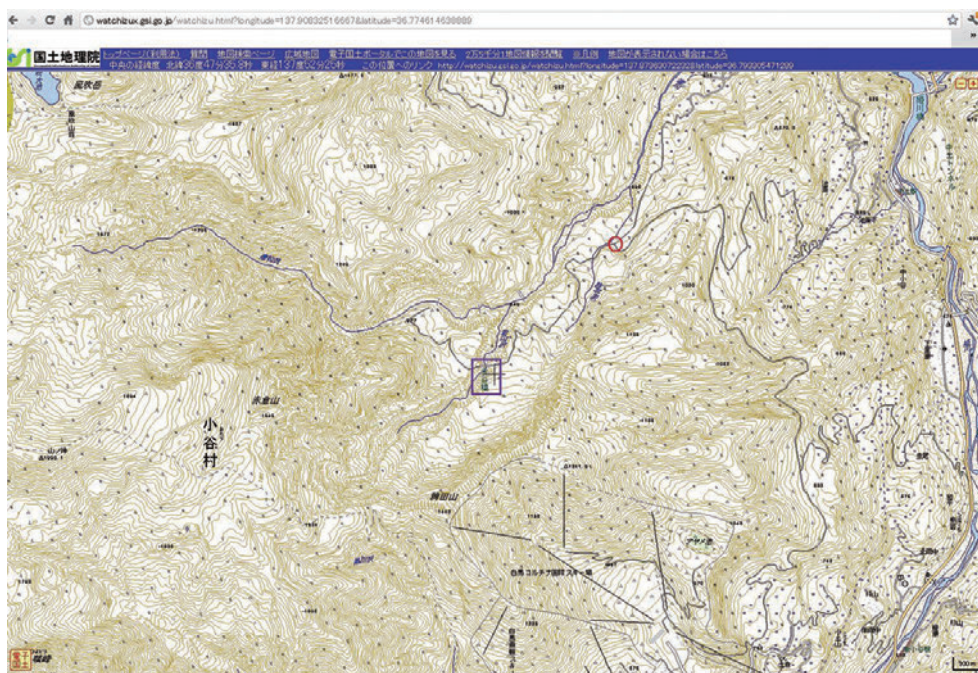
次に幸田文が訪ねて行くのは、長野県小谷の稗田山崩壊です。いくつか説はあるようですが、「大谷崩れ」<sup>おたり ひえだやま</sup>、「常願寺川 鳶山崩れ」<sup>とんびやま</sup>、「稗田山崩れ」を日本三大崩れと呼ぶようです。幸田文は7月7日に小谷村へ行っています。しかし、霧と道路工事に阻まれて、間近に見上げることはできなかったようです。最後の部分を引用します。

止むを得ずあきらめて、遠く山の頭だけを見て引上げた。縁がなければ、二度行っても二度ムダになるが、いつかもう一度行って、可能なら橋よりさらに近付いて、どんなふうに壊れているか知りたい。崩れにはそれぞれの雰囲気があり、たたずまいがあり、一様ではない。稗という穀類の名のついた山である。大谷、大沢、鳶、の崩れともまた違うと思う。(幸田文『崩れ』講談社文庫、136頁)

何やらとても残念そうな終わり方です。第1図に国土地理院の地図閲覧サービスで見た稗田山付近の地形図を示します。四角で印をつけたところが、幸田文が行きたがっていた金谷橋<sup>かなやばし</sup>です。のちに幸田文の文学碑が丸印の場所に建てられました。

孫である青木奈緒の『動くとき、動くもの』によると、幸田文は「何かにつけていつか必ず見に行きたいと口にしてはいたが、それはついに果たされずに終わってしまった。」ようです。青木奈緒は幸田文が訪ねた25年後に稗田山を訪ねて、念願の崩れを見てきました。『動くとき、動くもの』には、幸田文の文学碑をめぐるエピソードも出ています。

それから時が流れ、稗田山の大崩壊が起きた1911(明治44)年からも80年が過ぎ、祖母が書いた一節を引いた「歲月茫茫」の碑が、金谷橋から山をくだった石坂という



第1図 国土地理院地図閲覧サービス (<http://watchizux.gsi.go.jp/index.html> 2012/05/29 確認) による稗田山付近。中央の四角は金谷橋、その北東にある丸印は幸田文の文学碑。

1) 産総研 地質情報研究部門

キーワード：シームレス地質図, 幸田文『崩れ』, 地すべり, 地理情報システム (GIS), Google マップ

ところに建てられることとなった。1992（平成4）年10月の碑の除幕には母が伺ったが、お披露目がすむかすまぬかで、もう雨もよいのお天気だったと聞いている。

それから3年後の1995（平成7）年7月11日、小谷村はかつてないほどの集中豪雨にみまわれる。先に述べた姫川沿いで重要な幹線となっている国道やJR大糸線がずたに寸断され、停電と電話の不通があいつぎ、村は一時完全に孤立するほどの被害が出た。この惨状にあって、重傷者1名が出たきり人命が失われずにすんだのは、災害とともに暮らす小谷村の小谷村たるゆえんである。

豪雨のさなか、「歲月茫茫」碑もまた向かい側の山の崩落をまともに受けて台座ごとぶっ飛び、土砂の中へ行き方知れずと消えた。碑をつくるにあたって、どうせつくるなら立派なものを、と選考の過程で選ぶ石はどんどん大きくなっていった。移動には重機2台が必要だったという。それが土砂に埋もれてわからなくなってしまった。当時の写真を見ると、山からまっ赤に流れ出した土砂がそこら中にずでっと広がり、すでにまっ茶色の濁流と化した浦川に流れこんでいる。

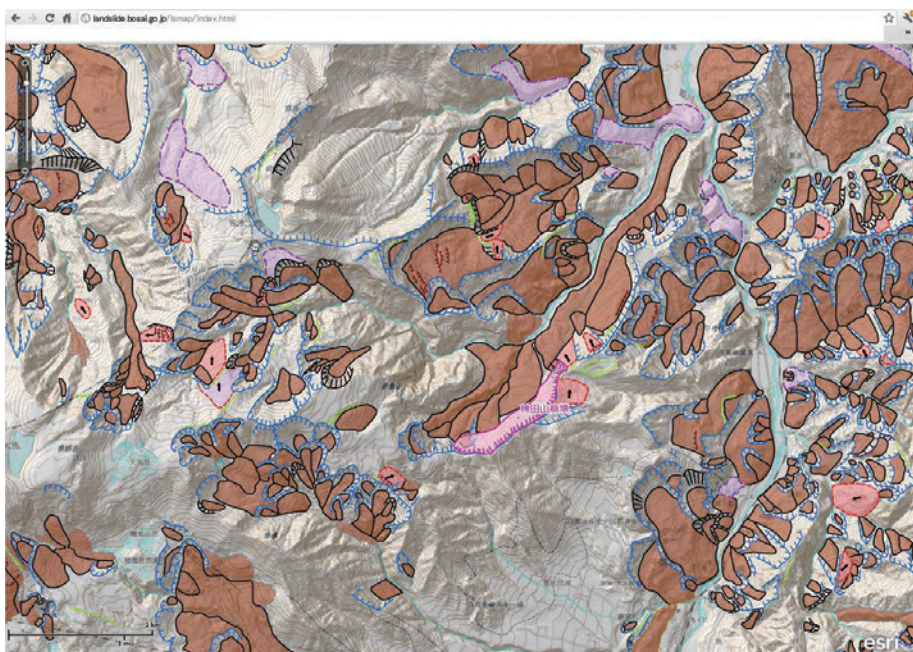
碑は翌年になって80mほど移動したところで見つけられた。建てるときにご尽力くださった方々に、探すときにもお世話になった。土の中から石の角がわずかのぞいているのをご覧になっただけで、あれだな、とすぐにおわかりになったようだ。引きあげてみると、碑文を刻んだ御影石には幾筋かの傷が残されていた。

6月24日、改めて寄せさせていただいた母はこの傷を祖母の勲章と言ったとか。土砂の中をかいくぐり、そしてまた見つけ出してもらうなんて、祖母も本望に違いない。このとき豪雨による災害から1年近くがたっていたにもかかわらず、小谷の谷にはいまだに重機の音が響き、まだまだ復興作業がつづいていた。（青木奈緒『動くとき、動くもの』講談社文庫、138-140頁）

文学碑は、無事に再建されたようです。『動くとき、動くもの』には「今、碑は小谷の方々の手で気持ちよく整えられた一角に、祖母の好んだ大板谷楓と一緒に落ち着いている。」とあります。何とも縁を感じさせるエピソードです。

第2図は、防災科学技術研究所の地すべり地形分布図データベースに記された稗田山崩れの位置です。

稗田山崩れとは、松本砂防事務所の解説によれば(<http://www.hrr.mlit.go.jp/matumoto/hiedayama/about/index.html> 2012/05/29 確認)、1911（明治44）年8月8日に現在の小谷村にある姫川左支川・浦川の上流部の稗田山で大規模な山体崩壊が発生しました。浦川沿いに流下した土砂によって、23名が犠牲となりました。さらに押し寄せた土砂は、姫川本川を河道閉塞し、上流側に「長瀬湖」と呼ばれた湖を形成しました。湖の端部は3km上流の下里瀬集落まで達し、43戸が浸水したと記録にあります。その3日後には北城・南小谷の住民が排水路を開き、<sup>ほくじょう</sup>湛水位をわずかに下げることができたため下里瀬集落等は



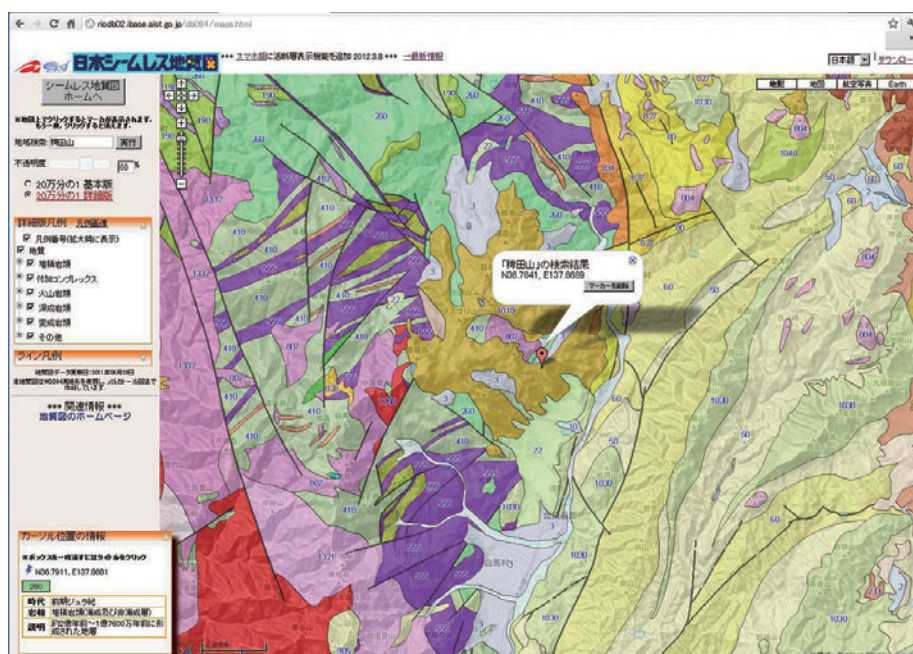
第2図 防災科学技術研究所地すべり地形分布図データベース ([http://lswb1.ess.bosai.go.jp/lswb\\_jp\\_new/gis/map\\_blue.html](http://lswb1.ess.bosai.go.jp/lswb_jp_new/gis/map_blue.html) 2012/05/29 確認)で稗田山崩れ付近を表示したものの。

漸次引水しました。一方、上流から流れ下った濁流は下流の来馬河原集落に流れ込み、役場・郵便局・駐在所をはじめ多くの民家や水田を埋めてしまいました。翌1912年4月26日に2回目の崩壊が、同年5月4日には3回目の崩壊が発生しました。そして7月21日からの豪雨で22日に天然ダム（長瀬湖）は完全に決壊し、来馬河原全面を濁流が襲い、わずかに残っていた人家も流失してしまいました。

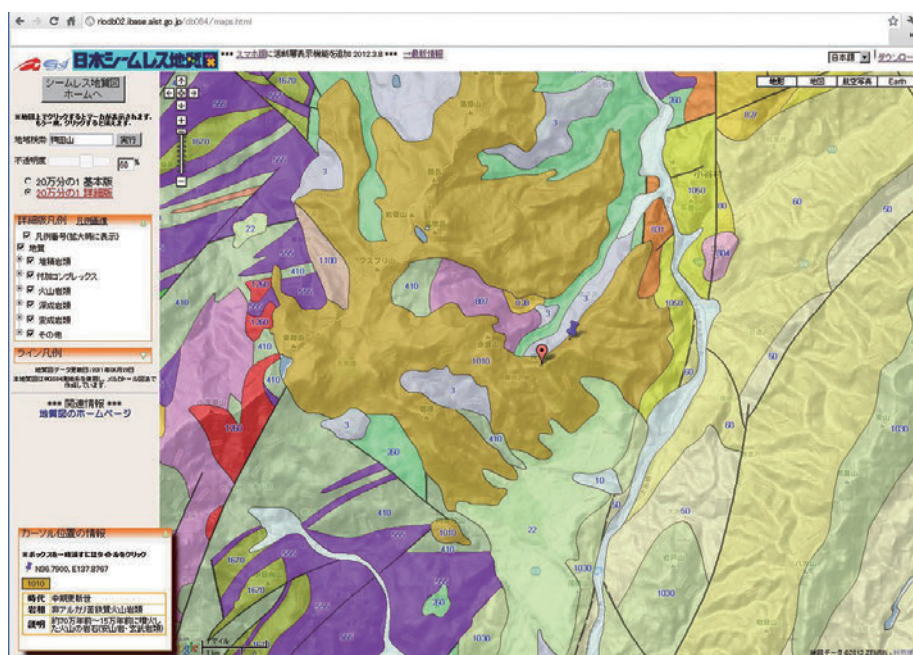
防災科学技術研究所の既往斜面災害データベースによれば、この稗田山崩れの原因は不明ということです。突如山が崩れたというのですから恐ろしいことです。

## 8.2 シームレス地質図で見る

それでは、該当する場所のシームレス地質図（詳細版）（産業技術総合研究所地質調査総合センター編、2012）を第3図と第4図に示します。まずは、「稗田山」で検索をすると、



第3図 シームレス地質図による稗田山周辺の表示。



第4図 シームレス地質図による稗田山崩れ周辺の表示。第3図を拡大したもの。中央のバレーン形マーカーは稗田山を指す。ピン形マーカーの指すところの凡例が左下に表示されている。

ここはヒットしてマーカーがつくので、どんどん拡大していきます。凡例を表示させると、稗田山には1010番の凡例番号がつけられている「約70万年前～15万年前に噴火した火山の岩石（安山岩・玄武岩類）」が分布しています。さらに稗田山の北側には、3番の凡例番号がつけられている「地すべり・崖錘堆積物（崖や急斜面から崩落した岩屑類が、その斜面の下部に堆積したもの。半円錐状を呈した地形を形成）」が山の麓にまとまって分布しています。そのほか3番の堆積物は複数個所にまとまって分布しています。これは、大量の土砂が崩れる大規模な斜面崩壊が複数個所で起きていることを示しています。5万分の1地質図幅「白馬岳地域の地質」（中野ほか、2002）によれば、火山岩が変質・風化作用を受けているところや、向斜・背斜構造の発達した堆積岩が分布するところにも大規模な地すべりが発達するとあります。稗田山も古い火山岩の分布が見られますので、斜面崩壊が起こりやすい地質だと言えます。また、糸魚川-静岡構造線に付随する活断層の古地震活動も地すべりの誘因として挙げられています。

## 文 献

- 青木奈緒（2005）動くとき、動くもの。講談社文庫，東京，333p.
- 幸田 文（1994）崩れ。講談社文庫，東京，206p.
- 中野 俊・竹内 誠・吉川敏之・長森英明・苅谷愛彦・奥村晃史・田口雄作（2002）白馬岳地域の地質。地域地質研究報告（5万分の1地質図幅），産業技術総合研究所地質調査総合センター，105p.
- 産業技術総合研究所地質調査総合センター（編）（2012）20万分の1日本シームレス地質図データベース（2012年3月30日版）。産業技術総合研究所研究情報公開データベース DB084，産業技術総合研究所地質調査総合センター，<http://riodb02.ibase.aist.go.jp/db084/maps.html>（2012/05/29 確認）\*

\*2013/05/10より<https://gbank.gsj.jp/seamless/>に移転

---

MORIJI Rie, NAKAGAWA Mitsuru and SAITO Makoto (2013) Seamless Digital Map of Japan shows landslide slopes in "KUZURE" written by Aya Koda (8).

---

（受付：2012年5月29日）